朝夷巡島記 第八編 一

へ 13
704
36

曲亭主人編輯

朝夷巡嶋記

一柳齋豐廣畫

輯五巻

文金堂梓

遠
門 704
號
巻 6
明治三十六年十月九日

朝夷巡島記全傳第八編叙

和漢新奇之譚。從古昔至于今。所著若干卷。雖然佳作稀焉。這朝夷巡島記者。曲亭翁戲墨雜興。燈下之眠未覺。頻談無根之夢。嗟夢哉夢哉。盧生一夢五十年。足示人生一期矣。南帝一夢南木者。以足清天下矣。貴賤尊卑貧富及。

哀歡苦樂俱夢也。覺而一堆之土饅頭。孰不遑於終。煙乎。生前富貴食前方丈。身纏綾羅錦繡。却罹獄苦趣焉。生前貧賤食藜藿。身纏褸褐絺綌。却生昇平樂國矣。無他善與不善而已矣。是以小說者流。克考其夢之味。諭勸懲之意者。以謂佳作可也。今及綴於此編。雖頗基其意。啻是不免紙古人之糟粕之譏云爾

皆安政四歲次丁巳仲冬發行

松亭迂叟題并書

朝夷巡島記第八編全五冊卷中總摽目

卷壹	續集第十一
	英雄議を鎌倉ふ帰ふ
	義邦石戸ふ孩児を設く
卷壹	同第十二
	同氣相求む奸計の密話
	理を説狩を止む婦人の實
卷貳	續集第十三
	一頭の野猪確執を釀し
	二歳の小狗隱川ふ漂ふ
卷貳	同第十四
	幻術を現ぜ山神の祠
	危難を救ふ夢菴法師
卷	續集第十五
	草菴の奇遇源家の族
	道人無為の教へを説く
卷叁	同第十六
	邯鄲の草菴の夢語
	石戸の旅寓家族の歎息
卷	續集第十七
	主を索ね任ぶ隱川の上
	奸計一ぶび就る石戸の郷士
卷四	同第十八
	黄金ふ溺る優婆塞ぶ浅智
	急ふ迫ぶ佳人の嬾ひ
卷	續集第十九
	身を捐て節烈を全んとし佳人の情
	残毒忽地報う家族ぶ最期
卷五	同第二十
	初て非を悟る懺悔物語
	奸計再三到る程谷の驛
	通計二十條總摽目畢

猿面大王
吉冠義見者邦
虎賁將軍

妖魔幻術雖精奚為勝善者魔
熊威魔王
狐妖神通

加之此
歯の蒼も
ちらきらと
ちりて
さらさらと
○朝夷三郎
義秀

能信於
南海
之
民
廟食百世
而不絶
彼其必
一日安於朝
廷之上
右假賢輔道之之文
而充義秀
○葛西清重
御教書

○義邦の嫡男 翠麿

古今集 今さらに なに おいつはすらむ
世のなかは うき枝 ちりけり
世をぞ思ふ

○三草太郎五昌之

○吉見冠者義邦の室 笹姫

めくるも
まくるも
もとけも
ものも
まるも
神の名も
ちりまれ

桂園一枝 景樹

○宮小四郎弘義が渾家 谷木

附言

○毎編姓氏畧目なり。今この編に新出の者。宮小四郎弘義仝童次秋弘と弘義が渾家斧木。修験修道院酷殘の他ハみな前編に出る人なれバ。別に畧目を掲げ出さず

○此編にて朝夷義秀。判五等が讎を討ち。巴の尼に再會ある迄の趣向なりしが。義邦の本傳多端なるをもて。いまだ其場に至て竭さず。既に楮數限あれバ。其ハまた後の篇に譲る

○すの編總て吉見冠者義邦の傳繁くして。義秀が事蹟稍寡なけれバ看官遺憾多かるべし第九編に至てハ専ら朝夷の傳を挙ぐ。前後の猥雜作者の苦心宜しく察しるべし

金水再識

朝夷巡島記全傳第八編巻之一

東都 松亭金水編次

續輯第十一

英雄議して鎌倉に帰る
義邦石戸に孩児を設く

案下前齣再説獣六郎ハ義秀にうち對ひ。主僕不慮なる危難ハあれど安泰にして尊顔を拜するぞ嬉しさよといひて懐捺探り。岩衿ある判五が状を把出しておなじく依這回命に任せ義邦ぬしと石戸の荘へ恙なく送りし如く。處ある古跡ハこの年来人住ずて部ハ壊れ楼傾きて足を入るべきも容るらず困てを郷に住居する宮小四郎ハ家居も廣し。彼の修理を加るにまづ此家に居らしめてよりて義邦ぬし夫婦主從を其處に入り。日あらず番匠を促して。まづその作りを始めける然るにその果るを俟て安閑と居るべきにあらねバ夫より

越の岩神へ赴くと暇をもとめ吉見ぬの宣ふ江三二廣光も。こゝろうゑ遣
遣はるゝとゞ今二三日逗留して。倶に彼処へ赴くべし。その帰らん比又あゝ修理も
全く公就まゝ〳〵とあるよりて逗留しぬ。その明の日笹媛い産のもつゝを悩ま
ゝ廣光指ぬ摽吉及びまゝ下僕も彼是と物まゝとゝろ雄士ゆゑ。かゝ所あ
物の要ふ立ゝとゝと多り。こゝふ彼宮姓が渾家の斧木ゝゝろゝ年も四
十と三ツ四ツ紹て老あり乳ある女子あゝ。その初めゝ媛と労り。伝実ふ
欽侍ゝ媛ゝまゝ心と措き為のゝと語らひて。彼ゝ意ふ任せゝり。然れば産の
乳のつれゝと斉侍と去ゝ分抱のゝと。そゝその甲斐ふそゝ夜安ゝ殊の
ゝとき男児と産ゝこゝふ於て冠者ゝのゝ。ゝゝ一月ふ欽ひ勇ゝこれと名く
ゝのゝ。彼斧木い老実ふゝのゝまゝと昨今ゆゑいまゝ訓陳の深ゝふなゝ。
かゝる所ゝて廣光の渾家。浅良井のゝゝんゆゑと冠者も嗟きゝふゝ。ゝの

残ゝふも道理ゝり。一日も速ゝふ差ゝゝゝゝと。七夜の儀もゝ果ゝて。廣
光弦共彼処と起ゝ。急ぎ岩神ふゝり着ゝ。ゝの月末の恩と謝し。如此ゝの
ゝと告ゝ。浅良井母子と物ゝ飯らんゝ手。判五指ゝ尼れ弄ゝ。ゝゝゝゝ
歓び。浦殿のゝ子孫ゝゝ吉見の刀称ゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
生ゝゝゝ。彼家再ひ栄ゝ。ゝ代の穢ゝ。笹媛のゝん歓び。ゝゝゝゝゝゝ
らゝゝ。然いゝれゝも産ふ孫ゝ。隔ゝ分副の女子ゝゝゝ物毎ふ不自由ふゝゝ
在しけゝ。ゝゝゝゝ急ぎゝ浅良井ふ。起ゝ。ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ
己い判五殿ゝ。ゝゝ出し後会ゝ。如此ゝの功績ゝ。眤近の列ふ擇ゝれゝゝ。
義人光仲ぬのゝ。ゝ分の上のゝゝゝ。縡細やゝふ俗ゝゝゝゝ人ゝ笑ゝ或ひい歓ひ式ゝ
嗟嘆せゝゝ。ゝふゝゝ返翰ゝ傷ゝけゝゝ。然いゝゝ廣光浅良井ゝゝ。倶ふゝゝゝ
語ゝ急ゝ。三國街道ゝゝ袂ゝ別ち。下僕い武蔵ゝゝ志しゝゝ来ゝしふ荒川の

邉良渕に宿り需めしその宵に箇様さのことありて夜にしまゐる剥落の様ハ
ぬに認しる夫より後の一件ハ尚にしるしてぬくしらひて判五が返翰を出せバ
朝夷ハ手にとりあげてその表書を熟視して愁るゝ気勢に獣六卯八んと
得て主の報とうち成る。當下義秀首を擡げんそ積善に餘慶あり積不
善に餘殃ありとハ上古聖の金言にそ誰ともよく知ることなり吾身ハ往くかさね
となり抑判五ハ温順にて仮初にも悪を做さず人の為に伐を捨て一点だにも
惜ミ世ず佛を作善を能く努めて先祖を祀り親族を吊ふその家頗る富と
云ども身を謙りて驕れることなく忠直の性なるが近来落命うち続き終に
一家の絶るに至るも背の世の業因なる兒飯を以て量がしとひさてうち嘆く。
獣六ハまごその言を聞て膝を進めて何故に着刀称さべく嘆きるへ稲向一家
死異にて来ん春ハ媛を伴ふひとへ物をて後会へも越んと宣へり何条さるこ

のたべきと訝る面を熟視て然いへハ理るなり我後会を遂よりて陸奥へ向ふ
途中箇様々々にて一三翁が今盤に逢て一什を咄しまりその釈ハ如此々と大聖
堂にその縡の顛末具に語りて卅ハ你達が岩祚を起しまする夜のうちにて
ありしとぞ因て我今その所より出羽に赴中に入らんとするハ岩祚ハ去る室によ
らべ當の敵魔鬼五平とやらんを退治まそくまするが母を憑らふ巴の尼が安否氏
汎んと依この談にハ掛まるると咲て獣六大に駭きらふて返らぬ事あれどその賊
今一夜早く来らバ江廣光あり不肖ながら下僕も彼の家にありまバ勝と田在
媛および判五ぬり禍あしせバ悔しきことをまそがりと落る涙に眼を拭ひき
更に右左の羽をを側聞まる猛八ハ膝を進めて腰越娃より話説に寄る越の
岩祚判五とハ大人が泰山また田雇媛とハかの女児に産せ大人が子なるべし。
然ると賊に過まいとろ心中さぞそと推量れ在下不肖なりといへども大人に

隨順の〻初めは彼処へ旅き山賊の魔王平とやらんと撃んと掌の中にあり。大人が這回の危難にあるこゝを一朝のことにあらず。在下熟思維するに北条力称大人が大功屢あると忌み嫉み憎み假託大人を斃し心を快うせんとまる計策にあ〻ん〻かの旅人が持りたる人隠居の状にあてこゝを去ぬ則その状貌にあらずとて件の状をさし出せば人〻搦み火焼にせんとの這い和殿の案内に差出て時を内通して喪をんと計ること〻のこゝ茲いら〻在下北條に曾て仇もなく怨もなのに〻ふるまでに初手にふ心を発てこゝを計るにはやく竜潭〻とこゝに猛八小勝と磯とをもて大人に聡明人に新元胸中の明らかなる曇らぬ清ふ等一とこゝにども物陰りをなふあまべ還つて眼の及ばぬとあり。古人も虎ふ睫上の塵をこんぞとこゝに遺さり。在下等に遠所に在て更に官遣に拘ぎらるゞ却て事情を案ずるに精し。

思ふに北條刀祢父子の奸策ときまさに一朝のことにあらず。故に智量衆人に超えて後に已が隠策の妨とならんを老ぶ。暗に黙〻るの心あり。既に多田の藏人が陸奥に大功あり〻も奸計を陷れ罪なりんと做しけるゆゑ其罪信偽を決せんに嗔諸ゆゑに大人が明智忽地水源をたんぐさるゆゑ奸策にあらず奸策にあらざるの泡とあらざるにあらずとき〻一弁故幕府の時より番頭の老たる喪いんとする萌あまべ遠いあらず大家の一族愛く所従多し。用て斃せい容易〻ず故に枝葉を芟るそもく舊功の老臣こゝに所謂三浦和田畠山安達土屋と指ら〻その員いまだ今かの家に泡ふのあり。然るにその世移り更りて実は室に〻ぶるゝとべ故とこれを心とせべ。かの土肥先次郎が輩と大人に則和田の三男廷尉とゝに大人とゝに故に為に敬業のまべ依こゝに物に假託てまべ殺さんとすることを

素より甚だしく。その人の廉直のこと。表ふるえて縛と為さんと指揮その奸計ふ蔓らざること稀なるべし。と笑て朝夷こそ。ち強て和殿が強情究めて此なり。然るに這回力の好計ふ蔓りて脱ふ云云なり。尚ほ甚しき笑えし如く本街の長官の守護目代等懇成のこと。笑僻めて吾と強ひ拒ふせんとて競ふまとう勲こそ。もと争ふ罪を倍のこと。曼なりまとべ白沢我と出羽ふ入り。先それより我ふ出岩井を訊ふれどあり。議会の動静を知るべく。ふ。彼地へ帰らんとそふまとうとの呼へ馬の鼻と向るべ。まこそ逸人等の吾ふ生を強金人をまこ。まとと悪さ多ふ訴へ。その罪いひ解く術なりとべ今ふ敢ふ出ぬるべしみどいふ防いその理ありて。この此のよ〜寛ふ墜んこの情ひと長ふこと和殿が明辨なるべ。と問ひ〜まとて猛八。左右を顧ふいひ出るべ。長智殺の此を忘まて。かく言ふ烏滸なるまと畢竟大人が此を思ふの赤心よりして

いふ所倘ほ栄恢なり。舎人まこのとなり。周て若人隨ふ〜いたんと扇と筋ふ勝ふ三郎。今大人が宜ふ如く。こまより岩井へ赴さて自然日と延さば必ず死ふこのあしし在下が若ふ思ふ流金人敢り。才一這回の急務とて八が捜断の一事。この力と労さ手〜て。一朝ふ民と敢服。忽地静謐なるの係と言上てさて磐城の愛妾。疑ひ多ふ人るが如ふ〜ふ。ふ。時直ふ及び阿武隈。この此と辱ふ。竟ふ双傷ふ及べるべ。結れど駆ふ所業仇の因縁なるべ。と知るべ。深さ故もあり。乱なるべ時直ふ。阿武隈ふ。二個ふ生てこのひとり。彼ふ勢こそ八一個なる。厥ふ脈なる二個と斬害しまとべ。乳明らもるのこと。夫のこと。ふ方て。その擔の輩両個と搦め汐て。ふて来ぬまとべ。その密なるべ。と知るや否やさて。堂下のこと。泡狂ふ因て。強援せ〜ふ。あ〜ざること。渠等もこの知る所なり。と在るべ。ふ云上

白澤越ふ
猛八得失を
説く

うひて

獣六郎

あゝハ。執権こそ何ら計ら。倘雅頼といひみてぱ此と林示酒ゐどす
ふ旅て。彼隠語の狀とり。元明とゐ廣元善信二個のうち。旅へ急。
事故ゐく済めべ。今遅ゐあさハ怠りと言解ふ不ゐ。巴の尼ゐ再ふ見
ゆるゐと。亦その賊主魔五平と撃んとその後ふあゐ。但不日ふ賊と討。その
弊情と晴さゐ。欺ふ在下号ゐ。彼処ふ立紙ゑ大人ふ代りと賊と討べ。
大人いこまゐり一向ふ嫌金と飯りゐ。理非明白ふ述けまべ義秀熟考量ゐ。足
下の公論究めて理あり。然ゐハまゐ見ゐ。嫌金ふ帰らんのこ。絨魔五平と撃
てハ私の儀ふて遅くゐ。妨ゐ。足下も倶ふ嫌金ふあた父及び兄弟ふ対面と
做ゐ。と衆議決して夜と明。さて板鼻城の郷民等。志ハさるとゐまゐ。
嫌金と帰ふあゐ。かく多人数と伴ふて。その少えも宜ゐ。異心あゐゐど
疑ゐまん。さハまゐ各ゲ好云のゐと所ふ絡ゐて忘ゐ。他日志と知ゐらん

ふハ夫ゐの報いとゐべ。但你们ふ憑むとあゐ。此地と来ゐ途中ゐ。
舊友と訪ん。城戸四郎三草太郎五両個の従者とひき頒て。武蔵ゐふ向ゐ。
彼処ふ障ゐてあゐや。いまこの地へ到り著ば。程経ずして人来ゐゐべ。我ふ在
と知ゐゐゐて。進退と矣べ。倘かの両人駕城へ来り。如此このゐ。
行方と索ゐゐ。急ぎ両個も飯ゐべ。と演説して
と憑ゐゐべ。農民們ハ一容ふその美畏とひゐり。但此処ゐ居ふ副ふ列
まんと快ゐゐず。嫌金ふ居ゐ。居ゐ往き著ふ。ふゐ送り奉ん
と一容ふひゐゐと推註め。志ハゐゐとゐゐ。如く多人数と引俱て
帰らんと。却てこの鬼の為ふ宜ゐゐず。その賊ハ固く辞めて。然ハあゐとも従
者のうち。両個ハ脱ふ疎より別ゐ。その外ハ甲斐ゐた雑人のこあゐ。その内ハ賀
生捕と保獲ゐべき人あゐず。你達然ゐ思ゐゐ。五七個ゐそろ生捕。

労りの投げ藻食を送り給へば大慶あるべしと吹聴して人を点呼し君がれあるを見
て藻を多人数送りのせぶ。その手負の生捕は吾が家に引取り心易く
思せよと。扨て彼生捕を山便ふうち乗せ。数合十二三個まを副て藻食人と
遣り出せば当下の朝夷へ馬を送り農民に返し遣へて別れ出でぬ。生捕の所と
なり出て藻食人赴きぬ。紫下某生再説とは彼吉見冠者義邦が食邑
武蔵国石戸の荘入部なるが石戸左馬頭の古殿は年来人の住ぬ故に荒
格子も頽き倒れ檐は荊豈ひ茂りて人住べき容なはあらず。藻食人
はまづ藻食より。如此とその比彼処へ御教書の下りなるべし。その荘宅村長などを
評議して殿の修理を加へるべしと郷士なる宮小四郎弘義が方へ主と為すべしと
宣ひ遣ることなれば義邦と妻内とまづ彼荒へ招請せ打ち主人小四郎を
要のことありて近郷へ出で由を家まもりの。その渾家斧木嫡男董次秋弘

あるの出給へ美と渇して答應す。先年安達景盛が。この地を没収せ
らるるより。地頭とらんのあらざるべし農民は我を慕ひ。我は下部を待て
父母をもとく迷惑せしは這回君の下向なり人心大ふ定まるべし在下名を於ても
満足せり。父弘義も僅に君が入部と伝へ聞きて喜ぶ。
一この為に藻食より上と海を給食へ。ところ紙てゆひしが病人のいふなりぬらん。
今は於て沙汰もあるべし。然は是近きに帰郷して拝謁も愚ふべけれまづ後と
休息あり。且は彼の修理のこと。物の要ふ入ちゆひなど在下君の命と受て父
は振り右も左も。計らひゆうんと恭ふ。
ば。義邦も志の厚きを感じ。元来土地の安堵は内ふ。万のことを和融
なるべ。計らひは任じのこと扨て沼抜と挙て別るるなり。小四郎が渾家の斧木いこの
年四十あまり二三四ツあり。心の底いと老実なる容は人崖媛と

よく痛りつゝまるから寸まで懐妊をせし程もなくして勢冷の毒とぞ。
媛は夫の死に産をせり。いと辱きものを伝へまども常云ふ通り業じゃう産を安
うのありとも吾依も若きその折ふ二人の兒を産ぐるゞを安くして所も祖
母はあるべきに。是もまこと吉祥あるまで今も産の気つれのみで都てのみと吾
併ふ任じ少も心おきの人。こと老実れひろまで笑ひて不測の縁
ふこの家来り。住居と修理をする中ふも心配とかゝ伝ふ況てでなりぬ此
れあるべ言ふまでく今ふもあまと産の気つゞめ併ふせん敷代の家隷江三ゞ。
渾家浅良井といふ者ふ是なのことをとく伝て佐実ふ者ふあるれど今い
故あり元就の足岩井といふ所ふあり。吾仏の娘ふ岩井ふ三ゞ者ふ
こふ近へ人若のまで。まゞ昨日今日をまで達ゞ。初産のまゝて併せん祈
も所ふ見えず。孫金ゞ孫ゞ来りのへ。ゞ雄士あてをまなのこと。知れ者

の〻ふ伝まで夫ゞ。それをまで楽ゞまで。ゞ乳ふ痛りつゞ婦
さん。前へんゞまるれまでふ厚くまでゞ。ゞ乳ふ況ふ女児とまでまでふ伝ふ
ゞりまで。并木ゞ。ゞ乳ふ作まで。かゞる時ふ由縁ふ人ゞ人
ども世ふある程の人情へ無がとゞと。況て良人ふ小四郎へ今ゞ七民ふ陪り
郷士といふ人妻ふ生まれふ者ふ育ゞ容ふまで祖父へ賀茂殿のまゞふ冠
者義公ゞ二男ふ伝ゞ。然まで吉見の冠者殿ゞへ従来門根連衣ふて孫金
殿のゞへ若ふ見ふ他ふ異ふ係ふまで。ゞ賀茂次郎義孫ぬ。ゞ義光ぬふ
ゞ。ゞ寛の罪ゞ所ふ引き受甲賀山ふそその氏族。ゞふ対ゞ。ゞ
彼一族ゞ。ふ干隔労漢子ゞ。ゞて使ゞそふ地ふ引義り。朝田畠ゞ耕ゞ
所ふ三代ゞ送ゞふ。ゞ小四郎へ運拙ゞて孫金殿へ日本の惣追捕使
ゞふ威勢力宇宙ふ冠ゞ。ゞふ氏族ゞ。ゞ彩のゞ。ゞ寒郷ふ落ゞ居ゞ。

常に慚悔やしまもまさめのしも詮方なく周て紛うる董次秋こんその性を
ありあるべきその素性とうそ人並に做さんとも人狂心吾身ものとて念ずるう
他のものいはくめうどしひさうそち笑ひ這いそぞりの不同張舞のこまい更に
用のかる縁もある吾門いりで沐浴をするすべきう心と易く他のおもうま東ねまず
分付のようといと懇ろる會釈に従来迅朴の處女のまべその志と感じ
るに若に若ひ人ひ右左して両上月迫ろ雪のこるうーゞ暴に腹の痛むと称臣
媛い横ひき被ぎ悩む容に冠老と治め三獣六摽吉名ゆり舞の気の
美しやとと嘆ぐとそ斧木い来り。媛ゞ腹ゞど素カコ人ろ。這い催しに疑ひ
う。媛のとく来ませーよう。夫と推ろて隠婆さ人嫁て特と知るに彼と
呼んとふ奴に分付。走らすまで程ものく老媼来りて腰と抱き章つの辺ろ。
小腹へ摩り下るに媛い頻りに問へゞ。その夜二更ろ頃安と舞落ちんろ

の男児に産声ゆいと宏うに揚るまで。斧木いとまと懐きこう。ようゞ看護みて
伺ふ。刀称にも然とそ喜ぶと冠老いとまうと心中の歓び大ようさう
けり。媛とい備し舞に人座准備ろ。血の茉且湯漬ゞど進むるに称悦む
所ものくて心えまで清こーしうにうより人ゞも大に安堵のるひとる。まこ三三
日ことれどに。斧木ゞ且夕所も去らび。いと伝実にいるすのうこ。ゆまゞ別深の
宿けまべのにつて伝ふとる。心安のるたにまべ。江の三三ものとまと等就来。
迎の近ひに来る成るまべ一日の早く就に勤ゆ。浅良井と称て来らんと冠
者に不のこのう必ゆ急ぎてとと立る孫ゆ冠老と
摽吉のこその隣い甲斐ゆ雅人ゆ物の要ゆいゞまと。斧木ゞ称ゆ老伝
実のうに。この家の婢女ゆ且暮に心と用ひ孫児のと媛ゞ仰いさう癖の爾ざ
まべ。吉見の冠者ゆ心い易く。おりに不苦てまこ老に。そ人の歓ぶと初て

児と唐せられと云人も既ふいふ遠て実ふとまふ趣ん叙びあらるや。然れども
熟とつらふ此の人を思ひ回せバ苟くも遠祖ハ清和帝の皇胤ふして世々武将の職
ふ居り海内ふ威を輝せしも。栄枯得喪の慣ひふて一旦平氏の世と為るふ及て消
残る五更の燈火おるかあるかふ潜とゝゐまく時至りて源家の栄え征夷の
古来ふあるに總追捕使の職さへふ賜りて時めくことも併らず雖功ぞや吾
父なる範頼朝臣と義経朝臣が功績ふよまり。然ると讒者の舌頭ふ義経朝
臣ハ頓滅び続きて父も冤をゐりて伊豆の修禅寺ふて終ふ生害ありけん。
吾當時ハ稚あくて物の善悪も辨へねども忠義無二なる家臣等ふ冊かれて
人となりぬ。昔話を聞くふ腸を断おもひあり然れども往方なく亡ぬる人の孝養
あハ一国の主となり。終ハ家名を興さんと思ひの外成る念もあらねど縁あるよし人
微運ふて志をも遂げがたく寒郷の主となりて生涯を送らんハ後代までの

恥ふあるぞかし世を捨人の数ふ入りしぞ勝るらん。然ハ諦てより心の底ふ深く思ひ
とらざりし。今愁ふ孩児を産しまゝ縁となりてその志願ぞふ頓ふハ悔くも亦て侫倖と
なりて世ふある人の産しける家子ハ殊さらに祝やかくて三夜五夜の儀式ある人を
蟇目胞刀の式七夜とらへ一門いふも更なり親族の面々車馬門前ふ市をなして夫々
の進物など堆高くして積累ね奇傑とのみ是を祝し。現ふ目前ふ見しことある。
今寒郷の主となりてハ誰訪ふ人もあらず。一個両個の従者とさゝへをさく挑路へ遠
りて只しく淋しき寓居ふて兒の字を賜るのミと七夜の儀とする果敢なさを是
と祝彼を思ふにも。無端と限りなく愁ふて暮しけり

続輯第十二　同気相求む新汁の容話
理を説狩を止む婦人の寶

斯て爰なる家の主宮小四郎弘義が。この比家ふ在ざることも多かる程細と

法を去ける年安達景盛その地を没収せらるゝ事。実に武次郎義泛の後亂に
依故とりそこの荘園と賜つゝんと年来北條家へ出入をして湯浴始め内政父子の
家臣をも釈けしに。彼を媚世を賄賂に受たりとて憎さけれども深北條の心をも
任せ給ふを折もあらばとその後沙汰もあるべきとこゝに義村あるべきと片けも忘さず
怠らず。年甫暑寒いらへも更なり。泛会を従えて屑をあれども。総董次
秋山をも十八ありけり。今とそ件の荘園と。吹挙して賜はるとて帰りその聖
年董次へ十九ありけりそ馬ざえを達しうる。遠祖よりの由緒とりて石戸の荘とを
ぬすと脱を再三再四を及ぶ。内政今は不依ふ。りんて一時廣元善信をもそまとうく
評張りけるとて。義泛をその罪をあるべきとて故判官為義公の処心
敵とうるる筋あり。然るとその枝葉なるの。再る功績のあるべきを荘園と充ら
まんの。近曽依怙の沙汰を仰せられ。この縁を上す。新ろんとあらん不便あるべ。

時政の法をいなぶ。その後を止とり。然るを遠田吉見の行方を賜りゝとふをと
必ずとて年の望とを失ひ。特命とび下やゝゝ。いるを返ひをゝゝいるみまどころの年来
折を見て泛会を仕ひて北條殿の君臣を釈ゝ睦まうゞ分限を恵せる苦且
贈ふ。兵衛の故で吾此とを釈てもあれ董次とて世をあゝせんとゝくたるのこと
るゝ縁を望める石戸の荘今義邦を賜はりて。その未来永劫怨原の成就とをゝ
らずいの絶ゆる所為あり。然るを且どいとを指べきをあるべく気泛会を然て北
條殿を歎くと西三個の従者と釈て。泛会を赴とゝ。雪の下を旅宿をして。北條
家を祇候をつゝ序とを以て執権へ面謁を待けるべ。内政を改とを点ゝ。石戸北
荘と義邦を賜はるゝとを然をんとて来ゝ。斯て公家中の
遠計を。大とを教ひぬと心の底を察びて。一日国服の門を訪て。その宮小四郎ゞ
旅寓を訪る。小四郎義泛を敬びて取るのあるゝ敢ざ急ぎを結ゝ会りけ

まび。執次の者ども出て、まづ客間に誘ひ、見くすの処に控へ、ひまを執
次の雄士ども出、執権と呼ばれし人、罷り出ず。対面とるまでは、世に労りなく、
死居とも人心に任せ、いと無礼なるべし。平生に居る一室にて面会せよ。在
ほとの議海知あり。大慶なり。小四郎、とかく心中に欲び
吾こそ狂ひて思へども心隔てず書に居る一室に建んとあるに、原忠人の日の記に、
数回額著て老作とひ所労とす。彼を召せ、と仰の方を
ぐりまうるん頃、案内と請まうとその汀嶂なる法に遣て頻りに消へ、執次
雄士、こげまいと後に不合、狂ひて此方に来りて、此方に座敷
処と指して、そこに主人の居るに、頼進の人とうべ、小四郎、恥と縮め、早く佩
刀に扶とりて、ちうの障子の傍に、あるとおそるく席の外に、とうと人に狂と窺ふ。
時政、上座に縛と敷てあるに、夫と、とりて、外さんとするとまと

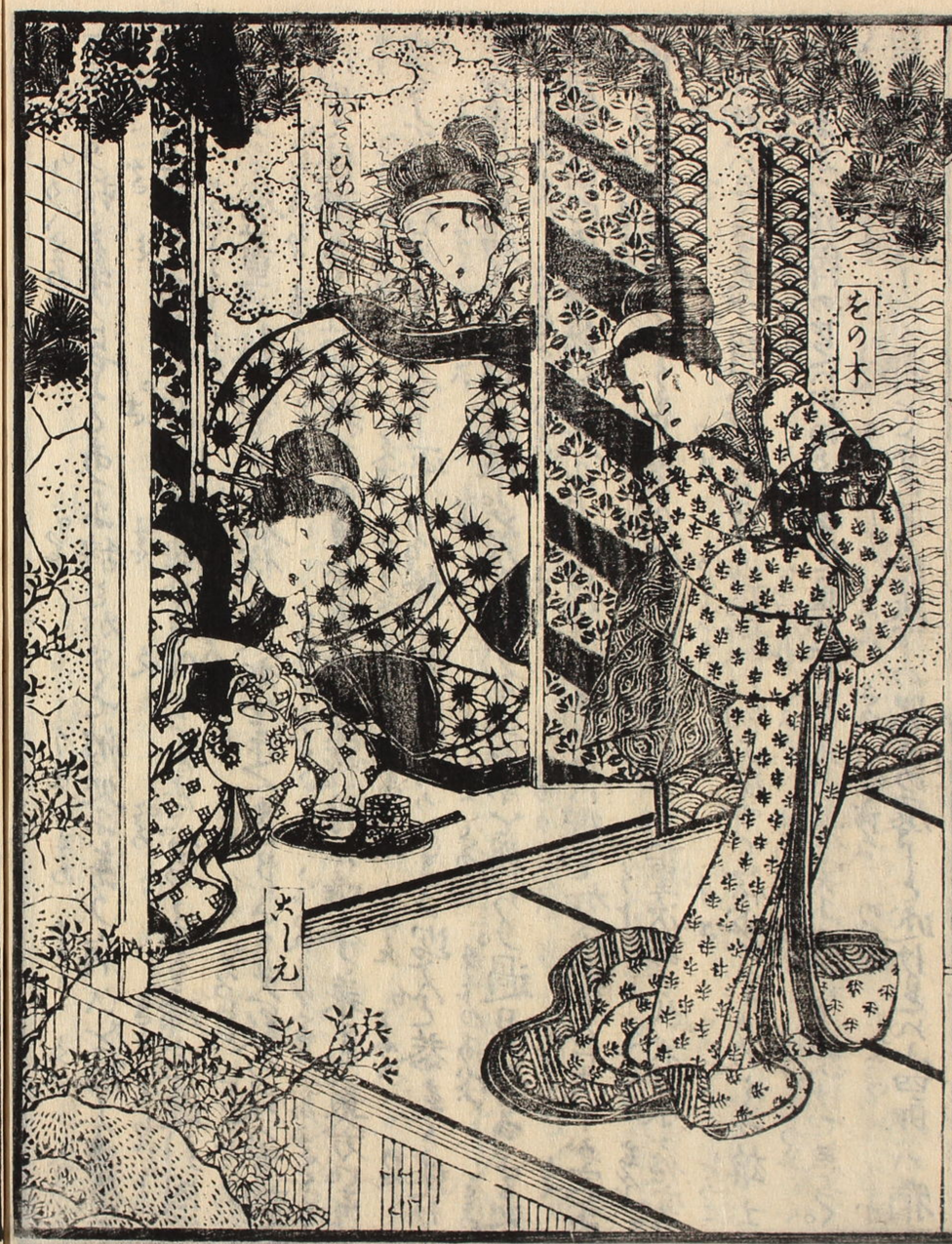
挙て相公所労と兼ねて、その侍従、早く坐外にあるべ在下が心中還て心底
とうとと笑て時政、荒示と笑て他の和殿と吾に狂ひ中に、詳と色のとあ
ま坐せ、小四郎、猶恐と教ひ、寒暖と伸べ所労と問ひ、然して後に出る、伝
縁にて、恩ひつる石戸の荘の一件も、這回吉見殿に場アん、吾に公の情所の
画策とすりしも、ひとへに、今更に絶方なれど、尚に相公の作に、頻に毛
と計らひ、但五に執権の職に在る、秘に計らひて、心易くなべと、いと懇に
宜ふ、忠義、半の場にて、心地せて、執権相公、定めて深き賢慮
書と仰て、腰さんも、ひとへに、ひとへに、這回の結構に教
も在さん、静まと、侯に如と、二回に、渠ざる、胸と、ひとめて、ひとうど、渾家の
歎とも、ひとへに、忍びて、然に、相公に拝謁、心の底と窺ん。
と、侯に、遠ざ、ひとへに、ひとへに、この後とひとへに、計らひて、給ひるやらんその條と、若しまに、

兼ねて老来の楽みとなさまくも欲するなり。彼ちからさんずる功もならぬ死くして
賞のこと。貪ぼれる烏滸の白徒と。相公の怒りに触るゝべきやうへなれば死ぬれへて寛にも
吐きえあげさるゝゆく賀茂殿の枝葉まで全く由縁のなきにもあらず。唯是をもて恩
ふまでなり。相公宜なる愛憐ありて荘園は石戸に限らず。すなはち秩父の山中なる
とも。死沢の言べ弘義が老後の眉目と彼させするなりと惨然として涙けるほど。時政
熟と徒役くり。和殿ゟ述懐理あり。故に己の地はわせとし。咲挙まさんとなりと。
既に再三に及べしうど。故右幕府のあんさいより荘園のことふつえてハ諸士一統に評
議ありて。各異存なうえにも事わが掛つぎ定ありて。吾ものまゝ自由ならぬく勝まなく
吉見に死沢はまひさえられども吉見の冠者は彼強者の義秀と骨肉のなく親
むくて後ろのちらが家に禍ひせんなの渠にあり。因て這田も陸奥にて比怯の挙動あ
はせを責め放ち。肉人の如くなり。方寸の地だも共へ下とざらひらさじが尼御台甚しの脈の怨

士なる渠と負ひ質て既にかく定めてまゝべ。弁と妨ぐべきよしまもなくてまづ手を宣に任しり。
あれ渠が死に不祥あらべ。忽地に変改せんと。弁は吾方寸の裡にあり。と声気低
めてひけまゝべ。小四郎弘義肚裡に大くく執権が心を推。膝て進め四きとてろ
いまも彼人縁て。父の寵に諂へし当家の不為と恨める由なり。実に相公が先
けんは毫釐の差ひあらず。多く不領を死あるは乱の基なるべけれど然れど渠等が分
際にて住宅朝夷義秀が家を竭して荷捺すとも何条のことあらんや。偏まゝ怪
し恩ふならあらば遠に注進りまゝすべ。相公があんにて犬馬の労を辞じとも。
在下いさゝ要す。母子心易くおもよ。と追従する気ある残り。時政听頬に笑み
含そ。和殿が好意今に始めず。吾ハなの義がも生にとまりして辰わり。
で恨むらくハ和殿の心中。実ハおもらぬ家に侍らなや。否のさてと気るべからず。つよふ心で
侍ることあ。檪窓と告べきことなれど。駟も舌に及ばざる。聖の金をあらしめべ慢不

舌を動す雅し。と涙が心を励ませバ。小四郎ハ早く敢ぞ。つイ不申数年高る鉞へ。ち
入ありゝ外様を装ひ物と宜ひし。げにさへあるゝわが在下が心始何ふと鏡ひの人
自。聯理なれふすゝれど在下萄も両刀を帯び争ふ人云を食て人を騙作るを
払なゝそへ也。开ハ人ふ申こそ依る人にハ相公が也相と申ふ見くゑぬるゝ者と歎息して。
恨めしなる面特を時政する声を低め。大くなる怨ことも称のひハ。よく足
下が心の帯と固めさせん為なるぞ赤心あるハ膝でも参まる。まづ此方へちくと
膝を進め耳突ゞ。聞信やくえしてぞ小四郎ハ退出りかくてその音ふ。
鏡剣を起りし。弟二月日ふ足立郡。石戸の鉞ふ著るが筐媛ハ一昨日の甲夜
男児を産るを使急ぎ舁者ぶ不ふ知る。在下ハ宮ふ四郎弘義ふてゆる。這
田ハ当ふと領せるを近く入部あるべしと御教書さへ知りぬれバ路次ふて刀称の
来給ふを迎へ奉るから给るまで鏡剣なる親族ふ。病者のゆひて今盤不ふ送

と申あり頓ゝ参り居よとあるふ辞ゝがたくて彼処ふ参り病ひと訪ひし弥態の
外急ゐる方ふ向んとえしど然ハとて走ふも帰らまぞ心ありくずも帰宅遅引因て
不束ある翁董次秋弘とりて名代とし。入部を迎へ参らしめ失敬の段ハ宥恕と
請のミ。依滞なく荘園へ移らせたまひて大ゝ慶至極殊ふ唯今兼ま貴方ハ落
安くして若君生まれたまへよし。返ゝの悦び祝着何かこまふ迎んと恭しく述け
まべ吉見の冠者も穫を復し。然ひょうすも当家を縁りり。過日入部ありる処
石戸左衛門の舊鉞頽敗ふよりて住ぐべく。その修理を加ふるれど足下が宅ふ
在べし。と荘官共のまうせるふより則とまゝ参りてより。董次および斧木が従実
詞ふ猶ハ是さまず。殊ふ弾家ある筐媛ハ初産ふして従者さるのの。こゝ雄士
なぞ弟ふつれ絆の足ハぬのことあるを且暮斧木が老実ふ痛りり挟けて恙なく
男児をさへ産しつる。都てとまゐるハ足下の賜なる厚しと述けまべ。小四郎ハ猶


かさひめ
をの木
さゝ元

弘義が家小筐媛翠鬟を産む
す邦
ひろひこ

種々と饗を飾り。珍味佳肴と調理させ。冠者の為に持出て。這へ鹿林の珍物。都て這回の佳儀と称す。
在下が寸志の快く一獻を勧せ。大慶の宴。この邊は海を遠く魚肉は殊さら拂底なれど。千寿川の鯉とのを新の者は賞翫する。梅田の牛蒡岩擬葱名物多く程近く。折ふし芝浦雑喉の来るもいと。是等は多人の便路よきに。倍々宴を。冬春は戎草海苔。この歩みも澤山なれ。他の品類。と。僅に殆ん人然は今とりとの所に居鉢とトみな自人燈篤く。法方の者も傍来べくそも人傑の居る処は一年ふて邑と做。三年にて都となるべきまし。偖へ人が礼を無華の地とゝん。君は宴殿の連枝とそ。いそで大荘の五十箇所も百箇所も持る人。他を在るゝ。内の不祥は是非もなく。今より後は稍ふ新奉るゝんと。殆ま

ぶ。祝ふに見の冠者は顔を赧らし。四郎は大ふ迫る。在下辛く然ふ他あゝん。近曽決言ふ通りそ欲なざる面持ふ。斧木は偖より口と副へ冠者よりの。冰ふ。この日ひそ妾が良人義は世ふ居迫るの去ゆ心ふ畏れさるゝ。日が善と。ふ限りもなく賞嗟。却て人ふ恥さみふ。ふいとしいらなる。さまで一点だらも佞奸なる。在の性を伐り。今よりの后は何ふまも食刀称の指揮と。そ。ふ従ふとると阿り。媚ふ白徒とふされて。兆の為ゆ。努さまる烏滸人なゝず。然あれ。せよとこゝち。笑ふ冠者は天ひそ心祝ふ。吾れ〳〵の艱難辛苦と。做しゝ。此ふ思慮を。ぞと小四郎が。詞を。ふ。習はゝ。ふいと。純ふ。ゝ。宴も。研とゝう。主客れ〳〵。略打ち。四方八方の物。張且は。冬〳〵。此の上の。沒沉。ふ。といひ。出。其興まで尽ぬゝう。小四郎冠者ふ。ゝ。ち。射ひ。筒ふ。ま。ひ。ゝ。君は。蒲殿の。ひ。

曹司にて産まれ給ひその時ハ三夜五夜七夜の儀式殊の外に略しぬひ実に源
家の嫡流としられたまへどもかれハ景勢ハ在下その折柄狩倉に旅泊あるが世の
中を憚りて斗り美しく忍ひ玉ひしが夫より津の出来て後ハ頭にさまよう給ひ
ひそ邉去させを玄木玲瓏のむ時みりてこの荘の地に来りたまひしが昨日今日まで彦
敷さへいまだ全く備ハざりしに若君の産まれ給へ。あすハさしも寂々にて祝しまう
すハ吾们のこ此若君も成長あらの後ハ一方の大将ともなり給ひなん。然れバそれ程の
儀なれて後来の繁栄を祝しまひて然るべし。よしハ是ならる邉郡にて殊に人杖なき
けまだ成りハぬ之懸流鏑馬をどのあるべき因もあらず。さりまこバ近日狩倉を催
さしまて若君の御誕生の儀を寿ぐべし。列卒ハ荘園の農民们と徴発すその
序に今度地頭吉見刀秋入郎を祝し若君の誕生を寿ぐる狩倉を催し給と。
觸るさえハ農民们もこの吉瑞を称ぐべしとあるが故にとありけまバ冠者の霊妾時

沈吟す。所ハ一段の事ふて足下が好まさるであるが今入郎その間もあらバ狩
倉を催さんと人を如何に思ふらん。此筋あらバ何ぞりの寿ぎにもあらずやとて
董次が傍より。武士ハ狩倉漁猟を全く庇の保あらせず。弓馬に水練を習ふ
の為にて武用と申すさりまバ入郎の折々にこまごと做しあゝて武威ハ法民に示す事豆
べし。在下若年よりといへども父の物語に兼ハまバ家系全く昇進にあらず殊くも
一世の程にも家名を揚るんと存ずるにあて折ふ狩漁をあすといへども数ならぬ身ハ
威勢もあらず。僅四五個の列卒を備ひ山谿を索る故鹿一頭をも獲るさきハ限り
もあらぬ獲物にて其心を慰めハ然まども馬にて兎ハ所巌石を跳るさいハ怒
らく人に負じとおもいさ然ハきハ一郷の人をあて列卒とす山野隈なく狩んこそ
よき興にてかの刀禰孫くも思慮しあらバ不日に催し給ふと切に勧めて止ざまバ江
三二廣光もどふ商議なきバ遂にさんと泉ハ生憎越へひさて皈る事ハ程遠し

如何ぞもまことと回答さえ果敢さえ云くいるさでこそ。董次い頻りに三度と勧めまさ
小四郎もこと笑の小事いさう沉吟ふ及ぶべきとのもあびふい人不福でるめくこえ
ぶび義邦元来暾湯ふそその気象ふ烈しくぞ不ふもあるを竹ふもあれ人の河と
渠ふ論いぬ性ふまりけるべ然いとそそるとふ伏ひぬ董次秋弘太ふ秘び父弘義ふ来
書と渡て一郷へ觸ふ〳〵。且明日とふ定めて。弓矢と指めその用具とそれ〳〵ふ調
ふる。狩者ふ今さ〳〵集あくべきとふあ〳〵ねび摽吉郎ふ。そのようと指らいて幅
あよび狩衣裳事見らめい芥木ふ憑ふ近郷ふ人と独でその准備頻りこさて
ふ芭媛い産所ふありてとのもと出産で式夜儀ふ人多れてう。狩者ふ対ふ変と
低ちこの旦人のいとときけばこの義見つ和ふの為ふ狩会として寿ぐころ。遠さ
試ふ〳〵れとも。脱ふ刀弘ふ狩衣裳と。悲ふべ仍ふ思ふふいふ出心ぞ。
今更ふ繕ふ〳〵ふ。成ふこの児と胎孕ふ。陸奥の猛

ふ罹り。刀弘い擒ふそ修羅五郎経任ぶ牢獄ふ在り。妾い渠ぶ側室と世人尚
辞むとの〳〵獄ふ在る。吉見人の狩者と戮さん。と挑むと再三再四妾熟思ふ
操と彼りて良人と助び孝貞の乃いふ仍ふと苟も妾ぶ父ふ九郎判官義経
と人ふも〳〵〳〵将の嬢ぶ強盗の側室とのもと。この辱ふ雪ぐがさ
ふ。ふいそとまふ従いぶい忽地良人の命と取らまえ。いふ世と夜の眼も合ぶ歎さ
死ふそ力るふ。ふ仲助仲力のこと。心不孔ふその昔父判官の念じ。山城勢る
の毘沙門天近くふ安ふ腰澤明神。まさ月来祈念す。圓通寺の観音薩埵伏
拝ふそ冥助ふ。ふ。その責漸く緩りて。この柵の西南る。塹港のもふあり。日毎
十領の衣と流〳〵。紅顔ふ芳恒とも且く安ふ心地ふ。夫ふ月の明ふ不ふ盟
と仍ふ舟ふ換へ。かの塹港と潜り出て。進退既ふ窘まり。ふ終ふ死ぬべ〳〵ふ
彼方の岸ふ泊む武士釣ふ出ふ盗ふ倚せ。この死も孤ふ救ふ。別人ふ〳〵ね

義秀ぬしかくて賊徒を屠り竭力称日全きことなりけり。妻子妾死すみらべ。この孩児も俱に死せ。彼方の土ともるべきと圓通大士の功力に周て不測にも助るつ月来少しの障るく人並に産育せしい偏に佛祢の加護あらんさまとの内に産り。子貞人と恤と生類と救ひ仇て報恩とるすべきと然るたのこと寿ど狩免して生くの獣の命とたすけんと俤しあい君ゲ日夫に仏合しうしたの議に曲てとうに生るの人うしそ絆めらる理あまぶ義邦日。軽に同差とるるつ。俤て展のひろり

朝夷巡島記全傳第八編巻之一終

文榮堂發兌文房書目

考槃餘事　明李日華著　東溪源謙校　白紙摺明刻綴帙入全部四冊

題畫詩選　岡崎應門著　全仨立全三冊

書畫皆宜　美濃氏撰輯　白紙摺明朝綴帙入全部二冊

題畫詩刪　秋川竹憲著　全仨立全二冊

書舗　長崎心齋橋北第五街　前川源七郎